

巻 頭 言

呼吸器学会半世紀—軌跡と未来への飛翔—

久保 惠嗣

社団法人日本呼吸器学会 (JRS) は、本年 (2010 年)、設立 50 周年を迎えます。4 月 23 日 (金) ~ 25 日 (日) に国立京都国際会館で開催される第 50 回日本呼吸器学会学術講演会を担当する事になりました。半世紀の節目の年にあたります。これまでの呼吸器学の診療・研究の歴史を振り返り、そして今後の 50 年間に展望することを主題にかかげ、「呼吸器学半世紀—軌跡と未来への飛翔—」[A half-century of respirology—past accomplishments and aspirations for the future] をテーマに据えました。

呼吸器学は、扱う疾患分野が幅広く、感染症学、免疫・アレルギー学、腫瘍学の三大分野に加え、呼吸器学の特有疾患とも言える COPD (慢性閉塞性肺疾患)、間質性肺疾患、肺循環障害などが含まれます。わが国は高齢化が著しく、呼吸器科医が扱う多くの疾患が増加しつつあり、内科学における呼吸器学の重要性はより一層増すものと思われます。従来、呼吸器病学は治療法のない難治性疾患が多いと言われてきました。しかし、最近ではこれまでにない生物学的製剤、分子標的治療薬などによる治療アプローチが盛んに導入されています。新しい治療方法が開発され、臨床現場に導入されると、治療の恩恵が得られる以上に、病態の見直し・新たな解明など、その領域は格段に進歩します。COPD、喘息、感染症、肺癌、肺線維症、肺高血圧症など、多くの領域で新しい治療法が生まれており、第 50 回学術講演会は 1 つの分岐点になると考えていま

す。主な領域でのトピックなどを列挙します。

NICE study ではわが国の COPD 罹患者数は約 530 万人と推計されていますが、実際に治療を受けている患者は 22 万人程度と大きな開きがあり、患者や一般医の啓発が課題です。肺年齢などもこの試みの一つです。2009 年 6 月に改訂された診断・治療ガイドラインの第 3 版では、COPD を生活習慣病や全身性疾患とする捉え方を鮮明にしています。この考え方は GOLD での考え方と大きく変わりませんが、JRS として喫煙の影響をより明確化したことが大きな特徴です。発生機序の解明も進んでおり、新たな観点からの治療薬の開発が待たれます。

喘息領域では、抗 IgE 抗体オマリズマブが登場しました。新たな機序からのアプローチであり、ハイリスクグループに属する難治例に有効であることが示唆されており、GINA 2006 では最も強力なステップの治療法として位置づけられています。喘息死のさらなる減少が期待されます。

感染症学においては、1, 2 年以内に新規の抗インフルエンザウイルス薬が上市されます。ノイラミニダーゼ阻害薬で、一回投与で十分な注射薬 (ベラミビル) や吸入薬 (ラニナミビル)、殺ウイルス作用を有する RNA ポリメラーゼ阻害薬 (ファビピラビル、経口) で、インフルエンザ治療の選択肢が広がります。レスピラトリーキノロン薬の開発が相次いでいます。大きな特徴はペニシリン耐性肺炎球菌にも有効であり、呼吸器の基礎疾患を有する高齢者の呼吸器感染症に効果が期待されています。ただ、キノロン耐性肺炎球菌を誘導する可能性があり、用法には注意を払う

べきです。HCAP（医療ケア関連肺炎）という新たな概念の肺炎が注目され診療指針のガイドラインが作成されつつあります。

肺癌は2005年の癌死亡数で胃癌を抜いて1位になっていますが、高齢化社会を迎え、これからますます増加するものと思われます。肺癌の治療戦略も大きな転換期を迎えています。従前より多彩となった新規抗癌薬の他に、分子標的治療薬として、ゲフィチニブ、エルロチニブに加え、抗VEGF抗体ベバシツマブも使用可能となります。さらに、我が国から固形癌で初めての融合型がん遺伝子EML4-ALKが見出され有望な治療標的として世界から注目されつつあります。

特発性肺線維症（IPF）に対しては世界初の治療薬として抗線維化抑制薬ピルフェニドンが登場しました。この開発にはわが国の研究者が大きく貢献しています。IPFの治療戦略の構築と同時に病態の解明が期待されます。

肺動脈性肺高血圧症（PAH）に対し、プロスタサイクリン（PGI₂）製剤エボprostノール持続静注療法に加え経口（ベラプロスト）や吸入用のPGL₂誘導体・製剤（現時点では海外のみ）、エンドセリン受容体拮抗薬（ボセンタン）およびPDE-5阻害薬（シルデナフィル、バルデナフィル）の3系統の治療薬が使用可能となっています。これらは、降圧機序が全く異なり併用効果も期待されます。特発性PAHのみならず膠原病などの続発性PAHにも有効であり、さらに、呼吸器疾患に併発する肺高血圧症の病態解明や治療への応用などが期待されます。

学術講演会では、基調講演をiPS細胞の確立で先駆的な功績をあげられた山中伸弥教授（京都大学再生医科学研究所）にお願いしました。招請講演は、Talmadge E. King Jr教授（University of California, San Francisco, U.S.A.）およびSumitra Thongprasert

教授（Chiang Mai University, Thailand）をお招きし、各々、肺線維症の診断・治療の現状と展望および肺癌に対する分子標的治療薬の役割についての講演をお願いしています。会長講演は私自身の過去の研究、JRSの将来への期待を話したいと存じます。

シンポジウムは各学術部会や各種の委員会からの推薦および会長提案の15題です。関連学会との共同企画は、アレルギー学会、結核病学会、呼吸ケア・リハビリテーション学会、肺癌学会/呼吸器外科学会、リウマチ学会、睡眠学会との6題です。将来計画委員会から呼吸器科医の現状、肺癌学会から肺癌登録、その他幾つかの報告もあります。International Symposiumは3題で、asthma, IPF, acute lung injuryに関しておこないます。また、本年は、The Year of the Lung (YOTL)にあたる事より、APSRとの共同企画でCharacteristics of Pulmonary Diseases in Asianのタイトルでシンポジウムを開催いたします。教育プログラムは、教育講演（16題）、若手医師のための呼吸器学実践講座および症例検討をおこないます。若手医師のための呼吸器学実践講座は、より多くの医学生・研修医が呼吸器学に興味を持ってもらえるよう、胸部画像の読影（病理との対比）、身体所見の取り方、呼吸機能検査の実践と読み方、の3講座を企画しました。市民公開講座は諏訪中央病院名誉院長 鎌田 實先生にお願いしました。鎌田先生は、NHKラジオ第1放送の祝日特別番組「鎌田実のいのちの対話」にパーソナリティーとして出演しています。最終日にはICD講習会をおこないます。一般演題は既に演題募集を締め切りました。原則的にはポスター発表ですが、一部はミニシンポジウムとして討論したいと存じます。

京都で開催されるこの学術講演会をJRSのさらなる発展のきっかけにしたいと期待しています。多くの先生方の出席をお願いする次第です。